

Science Congress, Tokyo, 1966, Tokyo, 1971

が、このたび刊行された。本書の印刷発行の経費としては米国ニューヨークの The Population Council, Inc., 財団法人矢野恒太記念会, 生命保険協会から受けた寄付金に負うものである。

本書の構成は次のようになっている。

#### Introduction

#### Part I. Population Dynamics

1. Growth (10論文)
2. Fertility (7論文)
3. Mortality (8論文)
4. Migration and Urbanization (7論文)

#### Part II. Population Control

1. Needs, Plans, Programs (13論文)
2. Analysis and Evaluation (5論文)
3. Means of Control (3論文)

#### Part III. Food, Development and Population

1. Food and Nutrition (9論文)
2. Population and Development (8論文)

#### Part IV. Resources for Research and Training (2論文)

#### Part V. Questions of Past and Future (2論文)

#### Resolutions and Recommendations

(山口喜一記)

### ハワイ東西センター人口研究所国際諮問委員会

標記の会議 (International Advisory Committee Meeting of the East-West Population Institute, Hawaii) が、1971年2月20・21日の2日間にわたり、ホンコンのヒルトンホテルにおいて開催された。

東西センター人口研究所からは所長の Paul Demeny および Sam P. Gilstrap, 委員としては P. M. Hauser, Mercedes Concépcion, Visid Prachuabmoh, Saw Swee-Hock, D. Yamamura, Stephen Yeh, 黒田俊夫のほか、新たに委員となった韓国の E. Hyock Kwon (ソウル大学校医学部長) とパキスタンの Nafis Sadik (Lady, Deputy Director General, Pakistan Family Planning Council) が参加した。

会議は、Demeny 所長から最近1年間の事業報告があり、これに基づいて討議が行なわれた。とくに fellowship の選考方針ならびに人口教育・訓練の今後の方針について意見の交換が行なわれた。

(黒田俊夫記)

### アジア労働力会議第2回運営委員会

1971年5月開催予定の「東アジアおよび東南アジアのマンパワー問題会議」(The Conference on Manpower Problems in East and Southeast Asia) のための第2回運営委員会が、1971年2月22日から25日までホンコンのヒルトンホテルにおいて開催された。なお第1回の会議は、昨70年8月、シンガポールで開催され、当研究所からは岡崎陽一技官が出席した。

今回の会議の出席者は、Chairman の Harry Oshima ほか10名であった。すなわち、Mercedes Concépcion, Paul Demeny, Philip M. Hauser, T. R. McHale, Arthur Paul, P. M. Sundrum, D. H. Clark, Stephen Yeh, Lindley Sloan, および黒田俊夫であった。

審議事項は会議のプランの作成、提出論文の検討および将来の活動方針についてであって、とくにこの会議の永続性と組織化について Hauser 教授が5月の本会議までに案を作成することとなった。

(黒田俊夫記)

## 1969年世界（大陸・主要国別）人口

国際連合統計局 (Statistical Office of the United Nations) は、1970年10月22日、『世界人口年鑑 (Demographic Yearbook)』の1969年版を公表した。今回発刊された年鑑は、1948年の第1集から数えて第21集めに当たる。この人口年鑑は毎回、トピック主義の編集が行なわれ、今回は「出生力」特集となっている。なお、1969年版についても日本語版が刊行された（国際連合統計局編、舘 稔翻訳監修、『世界人口年鑑 1969』、1971年3月20日、原書房発行）。

今回の年鑑によると、1969年の年央時点における世界総人口は35億5,200万人となっており、1968年年央より6,900万の増加である。現在の年平均人口増加率1.9%が持続されれば、世界の人口は2006年には2倍にふえて70億を突破することになる。

世界人口35億5,200万の大陸別内訳は、アジア19億8,800万、ヨーロッパ4億6,000万、アフリカ3億4,500万、ラテンアメリカ2億7,600万、ソビエト連邦2億4,000万、北アメリカ2億2,400万、オセアニア1,890万である。ヨーロッパの面積は世界総面積のわずかに3.6%にすぎないが、ここに世界人口の13%が住んでいるから、人口密度は1平方キロメートルについて93に上り、大陸別の最高を示している。アジアの面積は世界の面積の20%であるが、ここに世界人口の56%が住んでいるから、アジアの人口密度は72で、ヨーロッパに次いで高い。

1963~69年の世界人口の年平均増加率は1.9%であるが、この間の年平均増加率が最も高いのはラテンアメリカで2.9%に上っている。これに対して北アメリカは1.2%で、アメリカ全体としては2.1%にとどまっている。アジアは、全体としてみると2.1%で世界の平均に近いが、南アジアにおいては、東アジアの1.5%に対して2.6%という高率を示し、アフリカがこれに次いで2.5%となっている。オセアニアは2.0%で、ソ連は1.1%を示し、ヨーロッパは最低の0.8%となっている。

世界で最大の人口を持つ国は中国（本土）で推定7億4,000万、これに次いでインドが5億3,698万、ソビエト連邦2億4,057万、アメリカ合衆国2億322万、インドネシア1億1,600万、パキスタン1億1,183万、日本1億232万、ブラジル9,084万の順で、ここ数年変わらず、日本は依然第7番めに位置している。以下、ナイジェリア、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）、イギリス、イタリア、フランス、メキシコ、フィリピンの順となっている。

人口1,000万以上の諸国のなかで人口密度の高い国は、中国（台湾）の384、韓国316、オランダ315、日本277、西ドイツ237、イギリス228であるが、急激な人口増加率を示した台湾が、初めてトップになったのが注目される。なお、ベルギーは人口がわずかに1,000万に満たないが、その密度は316であり、これを含めると日本は世界で第5番めになる。しかし、各国の面積のなかには、山地や砂漠や氷結地などのように人間の居住が困難な地域が含まれているので、より現実的な居住可能な地域あたりの平均人口をもって比較してみると、日本は世界で最も人口稠密な国であると推察される。

次に、1969年版による世界の大陸・地域別および主要国の人口に関する統計表を掲げておく。

(山口喜一記)